

====今月号は4ページ建てでお届けします。====

トピックス 明けましておめでとうございます

昨年は3月の大震災と原発の事故に始まり、内外ともにたいへんな一年となりました。

新しい年が平和で平穏でありますことをこころから願わずにはいられません。

私事ですが、この一年間風邪を引くこともまったく無く健康に過ごすことができましたが、これも太極拳のおかげと思っています。

ところで、『之を知る者は之を好むものに如かず 之を好む者は之を楽しむ者に如かず』(孔子の論語より)という言葉は故楊名時先生がよく引用され、また書にもされていたと伺っています。まさに楊名時太極拳の真髄を表す名言ではありません。

さあ、この一年もまた、一緒に太極拳を楽しみましょう！



【隅田川とスカイツリー】

支部大会 9月24日(月)開催と決定

4年ぶりとなる第6回の東京都支部大会が9月24日(月)に国立代々木第一体育館で開催されることがこのほど決まりました。大会の詳細はこれから決まりますが、担当教室の皆さん、いまからカレンダーに記入しておいてください。ぜひ皆さんで参加しましょう。

地元で健康講義開催

2010年11月から地元の清新町で早朝野外太極拳を毎週土曜日に開催しています。これは2011年4月に発足した「清新くすのきプロバンス会」(江戸川区が展開している地域の老人クラブのひとつ)の活動の一環として、その発足に先行して行っているものですが、お蔭様で次第に参加者も増えてきました。

今回の講義は日ごろ話し足りないことを補う意味で、また年末の懇親会を兼ねて開催いたしました。

当日は18名の方が参加して、小生の用意した二つのテーマ、**経絡とツボ 基本篇と応用編** **筋肉を知ろう** を資料やパネルによって勉強していただきました。また、終了後は昼食をとりながら、ビールを飲みながらの懇親会で楽しく歓談しました。



左顧右盼~さこ・うべん~(55)

【第8話 「太極拳」は何時成立し、どのように広まったのか?】

2) 陳王廷と蔣発の関係

一方、楊露禅の“拳法”の師が陳長興であることは、大変明白な歴史的事実です。一般的には太極拳のルー

ツとして陳王廷から続く陳家の拳法が挙げられるゆえんです。(陳一族の系譜；前号の添付資料参照)

問題の混迷のもうひとつの要因は、蒋発という人物の扱い方にあります。蒋発は陳王廷の従僕とされていますが、それは陳家溝の陳一族を祀る祠のなかに掲げられている図像に描かれている二人の人物がひとりには陳王廷であり、その後ろに立つ人物が蒋発であるとされているところにその論拠があります。

後になっていわゆる「趙堡太極拳」の正統性、独自性を主張する人たちが、蒋発が陳王廷の師であるとか、陳長興に教えたなどという説を唱えています但其根拠ははっきりしません。

蒋発については没年が不明、係累がはっきりしない(一族が続いていない)ことから少なくとも陳王廷のような士大夫(支配階級)ではなく、庶民層の人間であったと想像できます。また図像から見ても、衣服の違いや、長刀を持って後ろに立っていること、などからも身分の差が読み取れます。従僕といわれていますが、いわゆる保鏢(ボデーガード)あるいは子飼いの武芸者だったと推理することも出来ます。(ちなみに、生年は1574年とされていますので、陳王廷が故郷の陳家溝に戻ってきたのを仮に1644年とすると、このときすでに70歳の高齢者ですが、この後故郷の趙堡鎮へ帰ったとされています。と言ってもほんの4~5キロ先きですが。)【最近閲覧したインターネットサイトによると、蒋発は陳長興によって鎮圧された李際過の乱(明朝の末期)で陳長興に投降し以降従僕として勤めた人物であるとありますので、ほぼ推定の通りです。】

陳家14世の陳長興の甥にあたる陳青萍が陳家溝から隣村の趙堡鎮へ婿入りしたことも、溯れば、鎮王廷と蒋発との主従関係の継承と考えてもおかしくはありません。何故ならその陳青萍が陳家の拳を趙堡鎮で継承していた一人であったことも歴史的な事実だからです。また陳一族の長であり、叔父である陳長興の指示によって武禹襄に陳家の拳を指導する(1852年)こともやっていますが、これも両者の関係を考えれば当然のことです。

しかし時代が下って陳青萍の孫弟子の杜元化になると、陳家の拳から意図的に離れて“趙堡拳”と名乗って、その独自性を強調し始め、その理屈付けに蒋発の名前を、陳王廷との関係は無視して、あるいは立場を逆転させて、使うようになりました。

3)「太極拳」の名前が一般化したのは意外に新しい

「太極拳経」が発見されて以来、楊露禅は自分の拳を「太極拳」と名乗るようになりましたが、それは当時の北京だけの話でした。当時の時代背景や社会的な条件を考えるとそれは至極当然なことで、すぐに中国全土に広がるようなことはまったく有り得ないことでした。またなんといっても、時代が悪すぎました。1852年(嘉永5年)も、それ以降もすでに清朝滅亡への大混乱時代ですし、1911年(明治44年)に孫文主導の辛亥革命で清王朝が倒れたあとも、革命のヘゲモニーを巡っての内戦状態は、国民党の蒋介石が北京に入ってようやく全国を統一し得た1928年(昭和3年)まで続くのです。



【楊露禅】

陳鑫(品三)が「陳式太極拳図説」を出版したのが1920年(大正9年)、陳発科が北京に出てきて太極拳の指導を始めたのが1928年(昭和3年)、楊露禅の孫の楊澄甫が「太極拳体用全書」を出版したのが1934年(昭和9年)、杜元化が「太極拳正宗」(趙堡拳)を河南省で出版したのが1935年(昭和10年)ということがそのあたりの事情を物語っています。つまり太極拳経発見からここまで70~80年ほど経過しているというわけです。

また、いろいろな資料によりますと、陳鑫は自著を出版するに際して、北京では太極拳と言う名前がすでに広まっているので私の拳もそう命名しただけだと言ったとか、陳発科も太極拳と名乗るのに当初は抵抗を示していたとか、という類の話が出ていることもまた、陳家側の当事者たちの複雑な胸のうちの吐露したものとも受け取れます。つまり、楊露禅と武禹襄によってうまく理論武装され、首都北京で公表され、名乗りと普及を

先制されてしまった“内外兼修の「太極拳」”を、主筋の陳家として認める、受け入れることに対する反発やためらいがあったことは容易に想像できます。陳家から見れば、楊露禪は外様^{とさま}の弟子に過ぎないからです。陳家の中でも趙堡鎮派が独自性を主張し始めたことも問題をさらに複雑化しました。

また、中国武術研究の第一人者松田隆智氏は著書の『続拳遊記』で、“陳鏞^{きん}（品三）は「陳式太極拳図説」の序文で始祖の陳トが太極拳と名づけたとか、陳王廷は太極拳に精通したとか書いているが、一方陳家に古くから伝わる『陳氏家譜』には九世陳王廷は陳氏拳手刀槍創始の人なり……とあり明らかに矛盾している”とも指摘しています。陳一族が明代の初めに現在の地に強制的に集団移住させられてきた農民の一族であることは通説となっていますが、その始祖の陳トが太極拳の始祖であるとするのはいくらなんでも無理なこじつけと私も思います。前述の陳鏞の発言とは矛盾しているようでどちらの説が正しいのか私には追求するすべはありませんが、いずれにせよ陳家の拳は楊家の拳の師匠格であるという立場を強調したいがための発言や記述であることに変わりはありません。面白いことに陳家がこういう主張をし始めると、逆に楊家のほうも陳長興の影響を否定したくなったのか、楊澄甫の時代になるとその源流を武当山の張三豊に求めるなど奇怪な主張をしたりします。お互い自派が古く、上位であり、優れているというような主張をしていたことがよくわかります。

太極拳の各流派の生成について簡単に時代的な流れを整理すると次のようになります。

1852年（嘉永5年）に武禹襄により「太極拳経」が発見される。これにより楊露禪は自らの拳を「太極拳」と命名して、北京で貴族や官僚などを対象に教える。これが後に「楊式太極拳」と呼ばれる。

同年これに先んじて武禹襄は陳家溝に陳長興を訪ね陳青萍から1ヶ月間ほど陳家の拳を習う。その後楊式太極拳に陳家の拳を加味して「武式太極拳」を作る。

1920年（大正9年）に陳鏞^{きん}（品三）が「陳式太極拳図説」を出版、陳式太極拳を名乗る。1928年（昭和3年）に陳発科が北京で太極拳の指導を始める。

孫祿堂（1861~1932）は郭雲深から形意拳を伝授されたあと、北京に出て程廷華から八卦掌を学び、さらに武式太極拳をも習得し、晩年（1920年代）にこれらを融合して「孫式太極拳」を創始する。

楊露禪の孫の楊澄甫（1883~1936）に師事していた満州族の呉鑑泉（1870~1942）が1933年（昭和8年）に上海に出て鑑泉太極拳社を設立、「呉式太極拳」を名乗る。

1935年（昭和10年）杜元化が「太極拳正宗」を出版して、趙保拳の独自性を強調する。

このあたりでようやく太極拳の各派が揃ったわけです。これが“太極拳”の歴史といえるものですが、お分かりいただけるように陳式太極拳（含む趙保拳）以外は楊式太極拳から派生したものです。

ですから、太極拳の「ルーツ」、「源流」としては、楊露禪の師である陳長興から遡って陳王廷にいたる“陳家の拳法”であり、そして“太極拳”の始祖は楊露禪とその仕掛け人の武禹襄であるというのが定説となっています。現に李天驥先生もその説を採っております。また、日本における中国武術研究家として著名な笠尾恭二氏もその説を自著「中国拳法伝」（福昌堂・2000年）で詳しく開陳しています。

“陳家の拳法”についての現在の整理は、陳家19世陳小旺によると、陳王廷が制定した套路は洪砲捶百八拳、五套捶、陳式長拳、十五洪、十五砲の五種であり、陳長興にいたって、これらを整理して、一路（洪砲捶百八拳、五套捶）二路（陳式長拳、十五洪、十五砲、これらを砲捶とも呼ぶ）としてこれを老架式と呼ぶようにした、とあります。（フリー百科事典ウィキペディア「陳式太極拳」による）

4） 新中国で一気に普及

太極拳が中国で大衆化したのは1956年（昭和31年）の人民の健康法としての簡化二十四式太極拳の制定と政府による強力な普及活動にあったことは言うまでもないことです。清朝や中華民国時代はこのような武術の習得はある特定の結社や団体、宗教グループ、少数民族の居住地などで閉鎖的になされるか、それも拝師制度の下で個別に弟子となる制度でしたから、いずれにしても限られた範囲での普及に過ぎなかったといえます。

状況が一変したのは、新中国になってからです。毛沢東主席じきじきの命令で、長い戦乱で疲弊した中国人民の体力回復のための健康法として太極拳が採用されたことにはじまります。以前にも書いてありますが、各流派の代表が議論しましたが、結局は楊式太極拳を採用することになり、李天驥先生【写真下】が中心となってまとめられたのが、簡化二十四式太極拳です。中国政府国家体育局が制定しましたので、俗に制定拳とも呼ばれるものです。楊式伝統太極拳八十一式から、誰にでも習得できる技を選んで編纂したものです。中国政府が強力に普及に努めたため、全国津々浦々までこの太極拳が浸透していったわけです。

もちろん、このときに、各流派の太極拳の優れた技術や理論が失伝してしまうのではないかと不安や不満も一方ではあったのですが、その後のさまざまな政治路線の葛藤、とくにあの文化大革命の影響があって、この課題は1979年まで持ち越されることとなりました。これ以降は太極拳に限らず、さまざまな中国武術の伝統が復活されるようになり、1980年からはそれまで長い間禁止されていた実戦形式の大会も開催されるようになりました。

太極拳を含む中国武術に関してはもう一つ大きな方向性が打ち出されました。それは中国武術を中国の代表的な国家競技としてオリンピック種目に取り入れたい、そして世界的に普及させたい、という中国政府の威信を賭けた戦略の設定です。太極拳についてはいわゆる規定競技としての套路や審判規定なども着々と整備されました。結局、太極拳を含む中国武術は2008年の北京オリンピックの正式種目には採用されませんでした。北京武術トーナメントとして「北京武術トーナメント」として「オリンピック公開競技」に準じるかたちで実施されました。太極拳については表演採点競技として行われました。



以上太極拳普及の歴史について述べてまいりましたが、簡単に要約しますと；

太極拳が誕生したのは1852年（嘉永5年）です。

爆発的に普及したのは1956年（昭和31年）の簡化二十四式太極拳制定によります。ただし、それは健康法として位置付けられる太極拳です。現在までこの流れは続いています。

しかし、改革開放政策以降、太極拳をスポーツ競技として広めようとする中国政府の政策が打ち出されて、表演採点競技としてもひろく普及してきました。その一つの目標点年北京オリンピック参加であったわけです。この方向は今後もますます加速されるだろうと見られています。

同様、改革開放政策によって各派の伝統的太極拳も復活しました。また実戦形式による中国武術の大会なども解禁されました。したがって、いわば対戦競技、格闘技としての中国拳法も逐次復活して盛んになってきましたので、このなかには太極拳も当然含まれています。

こと太極拳について言えば、今後ともこのような目的の異なる太極拳が共存しつつ相互に影響を与えながら、複層的に発展してゆくものと思われます。日本においても事情はまったく同じで、多様な選択肢があるということです。 【この項終わり】

旅をうたい拳を詠む

歳末雑詠

覗き見は後ろめたしと思えどもマウスで巡るあの道この家
銀行にサラ金カラオケ学習塾ドラッグパチンコ揃う駅前
熟年の歌手では足りずあの世から助っ人も来る演歌番組
欠礼の葉書をめぐりパソコンのアドレス帳を直す年の瀬
“マネー”とは理もなく知もなく情もなく欲のみありて飽かず利を追う
浄財もオイルダラーも裏金も“マネー”と名を変え世界を制す
あわあわとイブの夜空を彩りて空の木ひそと開業を待つ 【蔵前橋から】

